プログラム・ノート

寺西基之

2週間にわたって繰り広げられたチェンバーミュージック・ガーデン(CMG)もいよいよフィナーレを迎え、これまで登場した名手たちが豪華なプログラムを披露する。今回のフィナーレは弦のみのアンサンブル、および弦にピアノが加わるアンサンブル作品の特集で、最後には室内楽アカデミー選抜メンバーが一日限りのオーケストラを結成して、2つの協奏曲が取り上げられる。有名曲から玄人好みの渋い曲まで、曲目の多彩さがいかにもCMGらしく、特にトリとしてマルティヌーのきわめてレアな協奏曲が選曲されているのが心憎い。室内楽の世界の広がりが楽しめるひと時となるだろう。

スメタナ：ピアノ三重奏曲 ト短調 作品15 より 第1楽章

ボヘミアの国民的作曲家として知られるベドジフ・スメタナ(1824～84)の初期の代表作のひとつである。1855年9月、彼の4歳の長女が猩紅熱で命を落とした。彼は前年にも次女を失っており、相次ぐ愛児の死は彼に大きな衝撃を与える。特に幼くして楽才の芽生えをみせていた長女を彼はこよなく愛していたので、悲嘆の思いは測り知れないものがあった。その悲しみとそれを乗り越えようという思いを込めてスメタナはピアノ三重奏曲に着手し、こうして当時の彼の深い感情を吐露したような表出力溢れる全3楽章のこの作品がこの年のうちに生み出されたのである。

本日演奏される**第1楽章**はとりわけ悲痛な心のうちを鮮烈に打ち出した楽章で、冒頭からヴァイオリン独奏が嘆きの歌(第1主題)を奏で、悲しみと慰めの情の間を揺れ動きながら、ドラマティックな発展を繰り広げていく。

シューベルト：『万霊節のための連禱』D. 343

本日ヴァイオリンとピアノで演奏されるフランツ・シューベルト(1797～1828)のこの曲は、もともと1816年に書かれた歌曲である。歌詞はヨハン・ゲオルク・ヤコビの詩によるもので、万霊節とはカトリック教会で死者の霊に祈りを捧げる記念日(通常11月2日)、連禱は司祭と会衆が交互に唱える祈りのことである。シューベルトの曲は、この世を去った全ての魂の安らかな眠りを祈る詩の内容を深い宗教感情に溢れるじっくりとした歩みのうちに感動的に歌い上げている。

ヴィエニャフスキ:『モスクワの思い出』作品6

ヘンリク・ヴィエニャフスキ(1835～80)はポーランド生れの大ヴァイオリニストで、神童として早くから世界各地を演奏旅行して名声を確立した。作曲家としても技巧的なヴァイオリン曲を多数残している。『モスクワの思い出』もそうしたヴァイオリンの名技を生かした作品で、初期の1852年(17歳)の所産(かつてはのちに12年間ペテルブルクに在住していた時期の作と考えられていた)。ロシア民謡として有名な「赤いサラファン」(実際は民謡でなく、作曲家アレクサンドル・ヴァルラーモフ(1801～84)の歌曲)を主題としており、その歌曲が断片的に扱われるカデンツァ中心の長大な序奏に始まって、主部では歌曲の主題がたっぷり奏された後に変奏が発展、後半はヴァルラーモフの歌曲「馬に鞍を付けて」も取り入れて舞曲風の盛り上がりを示しながら、華麗な終結に至る。

ハルヴォルセン:ヘンデルの主題によるパッサカリア ト短調

この作品の原曲はドイツ出身で後半生をイギリスで活躍したバロック時代の大作曲家ジョージ・フリデリック・ヘンデル(1685～1759)がチェンバロのために書いたパッサカリア(組曲第1集の第7組曲 ト短調 HWV 432の終曲)である。ノルウェーの作曲家・ヴァイオリニストのヨハン・ハルヴォルセン(1864～1935)はこのヘンデルの曲を2つの弦楽器のために自由にアレンジし、演奏効果の高い作品に仕立て上げた(ヴァイオリンとヴィオラのための版と、ヴァイオリンとチェロのための版がある。今回は前者)。なおパッサカリアとはバロック時代に流行ったスペイン起源の舞曲で、短い主題の低声部や和声構造を反復しながら変奏を繰り広げていく楽曲である。

シューベルト:五重奏曲 イ長調 D. 667「鱒(ます)」より 第3楽章、第4楽章

1819年夏に上部オーストリアの町シュタイアを訪れたシューベルトは、当地の鉱山長官パウムガルトナーと知り合った。パウムガルトナーはチェロの巧みな音楽愛好家で、彼の依頼でシューベルトはこの五重奏曲を作曲する。通常のピアノ五重奏と違ってコントラバスが入る点が異色だが、これは依頼主の注文に応じてのことだった。作曲年については1819年説のほかに、シューベルトがシュタイアを再訪した1823年か1825年とする説もあるが、いずれにせよ作品全体に溢れる明るく清々しい気分は、風光明媚なシュタイアの自然を反映しているかのようだ。

5楽章構成だが、本日は2つの楽章が取り上げられる。**第3楽章**は活力ある躍動的なスケルツォで、伸びやかなトリオを挟む。**第4楽章**は自作の歌曲「鱒」を主題と

した変奏楽章で、変化ある美しい変奏が織り成されていくが、途中の短調の変奏のみ情熱的な激しさをみせる。

ブラームス：ピアノ五重奏曲 ヘ短調 作品34 より 第1楽章、第4楽章

古今のピアノ五重奏曲の中でもとりわけの傑作であるヨハネス・ブラームス（1833～97）のこの作品だが、当初は弦楽五重奏曲として1862年頃に書き始められた。しかし作曲者自身満足のいくものとならなかったため、2台ピアノ用のソナタの形に改め、その形で1864年にひとまず完成をみる。しかしブラームスはなおも表現の物足りなさを感じ、同年これをさらにピアノと弦楽による五重奏曲に改作して、今日聴くような厚みと広がりを持つ作品が生れたのだった。全体に激しい内面的情熱に満ちているが、それが緻密な論理的構成に裏付けられている点がブラームスらしい。

第１楽章は暗い情熱的なソナタ形式楽章で、揺れ動く情感の表出を確たる造形のうちに纏め上げている。**第４楽章**は暗い神秘性を感じさせる重々しい序奏の後、軽快ながらも悲劇性を秘めた主要主題を中心に、起伏溢れるロンド形式の主部が発展する。

シューマン：弦楽四重奏曲第1番 イ短調 作品41-1 より 第3楽章、第4楽章

ロベルト・シューマン（1810～56）が本格的に室内楽のジャンルに手を伸ばしたのは1842年のことだった。この年彼は幾つもの室内楽作品を生み出すが、その最初の成果が3つの弦楽四重奏曲で、わずか2ヶ月足らずの間に3曲が集中的に書かれている。これら3曲は古典的な書法の研究のあとを窺わせる一方で、自由な構成的扱いと幻想的なロマン性を示している点が彼らしく、そのうちの第1番は第1楽章（今回は割愛される）の序奏がイ短調、主部がヘ長調をとっていることに窺えるように、実質的に2つの主調を持つのがユニークだ。本日はヘ長調の第3楽章とイ短調の第4楽章が演奏される。

第３楽章は自由な3部形式のうちに変奏の技法を取り入れたアダージョ楽章。**第４楽章**はせわしない動きで推進する自由なソナタ形式のフィナーレだが、やがて突然テンポがモデラートとなってイ長調の牧歌的な楽想が弱音で出現、最後はテンポを戻してイ長調の明るさのうちに決然と閉じられる。

ヴィヴァルディ：2つのチェロのための協奏曲 ト短調 RV 531

『四季』であまりにも有名なイタリア・バロックの作曲家アントニオ・ヴィヴァル

ディ(1678～1741)はバロック時代の独奏協奏曲の様式(急－緩－急の3楽章構成、総奏の主題と独奏の部分が交替するリトルネッロ形式)を完成に導いた作曲家のひとりで、夥しい数のヴァイオリン協奏曲のほか、当時まだ伴奏楽器として扱われることの多かったチェロのための協奏曲もかなり書いている。ただ本日演奏されるこの曲は、楽章構成の点では典型的な急－緩－急構成をとっているが、独奏楽器を複数持つということもあって(2つのチェロのための協奏曲はこの作品が唯一)、独奏群と総奏との対比の仕方の点では独自の手法も見られる。

例えば典型的なヴィヴァルディの形式では速い楽章は総奏による主要主題に始まるが、この協奏曲の**第1楽章**では2つの独奏チェロのみによる主題に始まり、続いて総奏との掛け合いがあった後、独奏と総奏の交替が進められる。**第2楽章**は2つのチェロと通奏低音が優美な歌を織り成していく緩徐楽章。**第3楽章**は総奏の力強い主題で始まり、独奏と総奏が交替しながら応答し合って、響きの変化を作り出す。

マルティヌー：ピアノ三重奏と弦楽オーケストラのためのコンチェルティーノ H. 232

チェコの作曲家ボフスラフ・マルティヌー(1890～1959)はプラハで勉強した後、1923年にパリに出て新古典主義に傾倒、その後は新古典的なスタイルを基調としつつも、様々な書法を取り入れた独創的な作品を多数生み出した。ピアノ三重奏＋弦楽オーケストラという非常にユニークな形態によるこのコンチェルティーノ(小協奏曲)はパリ時代の1933年にパウル・ザッハーの委嘱で作曲されたもので、同年これに先立ってマルティヌーは同じ形態による協奏曲(H. 231)も書いている。バロック時代の合奏協奏曲(複数の独奏者からなる群とオーケストラとの対比に主眼を置く協奏曲)の手法を近代的に生かした作品で、独奏群(ピアノ三重奏)と弦楽オケ群とのやり取りが聴きどころといえよう。

第1楽章は独奏群と弦楽オケ群が落ち着きのない活発な動きで丁々発止に渡り合う。**第2楽章**はスケルツォ風の諧謔的な楽章で、独奏群と弦楽オケ群が交替して現れる形をとり、2つの群が一緒に演奏する場面がない一方、独奏群の中では2つの弦とピアノとが対比される。**第3楽章**は悲劇的な緩徐楽章で、恐怖感を感じさせるトレモロの弦楽オケ群に始まる。それを受け継ぐ独奏群の響きも暗然たるものがあり、途中で独奏ヴァイオリンに断片的に現れるカンタービレもどこかひきつっている。独奏ヴァイオリンに始まる**第4楽章**は民俗舞曲風の野性的な力感に満ちたフィナーレである。

（てらにし もとゆき・音楽評論）